変心

藤井颯太郎

ある朝のこと、夢から醒めたマキオは自分が一匹の巨大な虫になっていることに気がついた。肩からぶら下がる薄ら白い二本の腕、髭を剃りすぎて荒れた頬、仕事のために歩き疲れ、重たくなった両脚。身体はどこも眠りにつく前のマキオのままだった。だが確かな変化が一つだけあった。肉体を置き去りにして"心"だけが、完全に昆虫になっていた。

いつもならば規則正しく起床し、朝の食卓につくはずのマキオが姿を現さず、両親は困惑した。心配した父親がマキオの部屋へいくと、部屋中の家具という家具が、部屋の隅でバリケードのように積み上げられていた。よく見るとそれは緻密な幾何学模様に組み上げられており、虫の寝床のようにも見える。その"巣"の中に、息子はいた。どこから引っ張り出してきたのか、子供の頃に買って与えた昆虫図鑑を、息子は一心不乱に読んでいた。

「今日は仕事に行かないのか」と聞くと「わからない」とマキオは答えた。「僕がどこに載っているのか、わからない」涙目で図鑑のページをめくるマキオの姿を見て、父はすぐに母親を呼びに戻った。

マキオはしばらく仕事を休むことになった。母から、病院でカウンセリングを受けることを勧められたが、人間の病院へ行ったところで何かが解決するとも思えなかった。父が毎日運んできてくれる人間の食事は、どうしても受け付けなかった。仕事からも食事からも解放され、突然与えられてしまったあり余る時間を、マキオは睡眠で殺した。人の形をした身体を突き破り、本当の自分が羽化する夢を、マキオは何度も見た。

ある晩、慌ただしく行き交う羽音がマキオを起こした。見ると、放置した食事に大勢の虫が群がっていた。列をなし食料を運ぶ虫、水を掬い飲む虫、細く透明な糸で巣を作り、他の虫が罠にかかるのを待つ虫。人の社会から外れてしまった僕を、虫の社会が迎え入れてくれたのだと、マキオは感動した。

虫の大群の中に一匹、不思議な虫がいた。近くにある食事に目もくれず、本の上を泳ぐように、滑らかに駆け回っている。その虫はとても美しい見た目で、銀色に輝くカラダに、しなやかな二本の触覚が添えられている。マキオはその虫を昆虫図鑑で観たことがあった。"紙魚"という、紙を食べる虫だ。

紙魚の上品な食事を見る内、マキオは食欲が戻ってくるのを感じた。生まれて初めて、本を食べてみようと思った。紙魚が食べている隣のページを一枚手で破り、生のままで食べてみる。久しぶりに口元がほころんだ。本がこれほど美味しいものだとは知らなかった。気付くとマキオは次のページを破り始めていた。

それからマキオは、部屋にある本を（紙魚と仲良く分け合いながら）片っ端から食べていった。紙魚は実に美味そうに本を食べる。上品に紙を口元へ持っていくと、ゆっくりと頬張り、味わう。そのなんとも幸せそうな表情を見て、マキオは大きな胸の高鳴りを感じた。紙魚のことを好きになってしまった。

マキオは紙魚に宛ててラブレターを書いてみた。返事は期待していなかった。一晩かけしたためた手紙を恐る恐る差し出すと、紙魚はゆっくりと手紙の上を彷徨ったあと、丁寧に食べ始めた。食い破った穴から向こう側の文字が透けて、ところどころ文字が読める。マキオはそれを、紙魚からのラブレターだと思うことにして、本に挟んで大切に保管した。一晩かけマキオがしたためたラブレターを、紙魚がまた一晩かけ、ゆっくりと食べていく。言葉の通じない二匹の昆虫は、毎晩そうやって愛を確かめ合った。

ごく当然のことだが、部屋にあった本をあらかた味わい尽くした頃、マキオは病院へ運ばれた。人間の身体は大量の紙を消化できない。意識を失ったマキオは、そこそこ大きい手術を受け、一命を取り留めた。目覚めて状況を把握した後、なぜ自分は虫の身体を持たずに生まれてしまったのだろうと、マキオは悔しくて一晩中泣いた。

翌朝目覚めると、マキオは眼を腫らした一匹の人間に戻っていた。カウンセリングも大人しく受けるようになり、術後の経過も良好と認められ、二週間ほどで家へ戻れることになった。

マキオが退院し家へ戻ると、自分の部屋は清潔な"人間の部屋"に戻っていた。腐った食事は片付けられ、マキオが作り上げた幾何学模様の巣も解体され、沢山いた虫は唯の一匹もいなくなっていた。マキオが入院している間に両親が掃除をしたというのだ。虫が一匹もいないのは、今朝、殺虫剤を撒いたからだと母が言う。床に落ちている虫の死骸を、父が塵取りで集めている。

塵取りに寄せられた虫の残骸を見ても、マキオの心は動かなかった。だが眼は紙魚の姿を探していた。本棚から何冊か本を取り出し、パラパラとめくっていく。どこかにいるかもしれない。一冊の本に、栞のように挟まれたマキオの手紙を見つけた。マキオが手紙を開くと、そこに紙魚はいた。

気味の悪い触覚と白く濁った甲殻をカチカチに固めて死んでいたお陰で、死骸は綺麗なままだった。紙魚は死の間際、マキオのラブレターの中に身を潜めていたのだろう。マキオの心は、やはり動かなかった。その代わりに身体が反応した。胸が締め付けられた。出来れば、僕の帰りを待たず、忽然と姿を消していて欲しかった。穴だらけの、ラブレターだけを残して。

「声の展示」朗読 —— 松本 真依　小野 桃子
撮影（@豊中市内） —— 鈴木 竜一朗